

一 苑 史 一

東京帝國大學史料編纂所內
德島縣々立麻植中學校內
東京府下三河島三七、竹内方
立教大學寄宿舎東寮
東京市外長崎町三七二六
東京市小石川區第六天町四八
北海道函館市元町五五
朝鮮咸興中里七一
東京市深川區西森下町二九
東京市外高井戸町
東京府下池袋
東京市外杉並町高圓寺五二五
相州鎌倉大町一〇〇三
東京市外大森入荒井町新井宿一三六三
東京市外田端町高臺四四〇伊東方
東京市外高井戸町大宮前二八〇
京都市北白川下池田三六西村兵右衛門方

轉居

本郷區駒込林町八一

岩生成一
校友會
徐昌均
富井秀治
飯田豐
眞山青果
木村定三
金晃五
林五助
立教女學校
聖公會神學院
長興善郎
市川一郎
高浪忠八郎
岩淵兵七郎
十河佑貞
井出權衛

市外長崎町北荒井五二四
九州帝國大學法文學部

會費領收報告

一金五圓
廣瀬榮一
林五助
李永漢
出石誠彦
長澤英一郎

受贈圖書雜誌

歷史地理 第五十三卷一號
國學院雜誌 第三十五卷一號
佛敎美術研究 アルフレッド・フシエ原著 大雄閣
支那外交通史 窪田文三著 三省堂
參考東洋史 及川儀右衛門著 博文館
日本歷史地理學會 國學院大學

辻 善之助校訂

史料

異

國

日

記

(四)

豫 告

辻善之助博士の嚴密な校訂を経て本誌に連載し來つた「異國日記」は、その全文が印刷に附されるのは本邦最初のことであり、諸賢の激勵と過分の讃辭を受けたが、此處に更に愉快な豫告をなし得ることを喜ぶ。それは市村瓊次郎博士の御好意により、博士祕藏の文書「各項稿簿」を本誌第二卷第一號（通卷第七號）より發表し得るに至つたことである。該文書は清朝初期の記録であり、博士が親しく手寫されたものを底本とし、博士の正確な句讀を施されたものである。編纂者は諸賢の御期待を俟ち、此處に此の豫告を爲し得ることを誇りとする。

船本彌七郎上ル、大炊殿 上野殿御披露之所ニ、御祝着ニ被思召候、上様より屋形へ、御太刀二腰、御具足二領、甲共ニ被遣候、上野殿大炊殿へ音信有之

右之とく書付置て被歸候、傳極晚歸院、右之書付松首座口上聞候へ共、交趾より書を上候共、又ハいつ船本彌七郎歸朝候哉トモ不聞候間、其翌朝松ヲ四郎二へ遣シ、相尋候へハ、則十六日之晝、四郎二被來候而直談申候、

交趾ハ安南國也、安南國ノ内ノ交趾ト也

交趾ヨリ船本彌七郎、去年歸朝元和五年也 伏見ニ御座ノ由也

交趾ヨリ金札上候へ共、文舛慮外、永喜申出テ、其金札上様へハ不上由四郎二物語也、一伽羅一同油 一鐵炮二丁此進物斗披露之由也、キヤラモ油モ、イカ程共員數ナキ由也、右ノ進物ヲ上野殿大炊殿兩人披露之所ニ、御満足ニ被思召候由、兩人ヨリノ書可相認由也、上様より安南ノ屋形へ御

太刀二腰具足甲一縮被遣候由也

一上野殿大炊殿ヨリ面々ニ書ヲ被遣度候、其書モ可相認由也是、も安南國よりハ大炊殿へ斗、書ヲ上候テ上野殿へ不上候故、御兩人へナカラ書不上答ニ、進物斗上候由、去年伏見ニテノ御返ト四郎二物語也、兩人へノ進物ハ重而書付可給由也、兩人より返シノ進物モ重而書付可給由也、右ノ書、下書三通共ニ只今書候へと四郎二被申候へ共、左様ニ俄ニハ成間敷候、今日相調、明日是へ各御出之時直ニ可掛御目答ニ、四郎二被歸候、其晩ニ御年寄衆より料紙來リテ、明十七日ニ御城ニ論義候間齋ニハ御出有間敷由被仰越候也、四郎二ヨリモ切紙來ル、其文言ハ 先刻之通各様申上候へ共、明日ハ御登城可被成之旨、被仰遣候間、其刻御下書被成、御持參可被成之由被仰候間爲其申上候、恐惶謹言

二月十六日 中島四郎二郎

判

金地院様 猶於御合點ハ不及御報候 以上
如此切紙來候也

一十七日早天 御社參 御目見過テ歸院齋了、登城申
候、御論義過テ、右ノ三通ノ下書大炊殿上野殿ヘ掛
御目候、案左ニアリ、

日本國臣上野介藤原正純大炊^助介藤原利勝相共
呈于書

安南國大都統 麾下、

去歲船本顯定歸

朝、聞取口陳、知

貴域之風土海晏河清、祝々、抑奇楠香付油汁

鐵炮貳挺見獻吾

大樹源君、兩臣相議、以奏上之、忝納無他矣

遠方之異種、珍奇之芳意不淺矣、吾

邦之兵器鎧貳領共六具 太刀貳柄見投贈之、實

涓埃之報也、私趣載別楮、不悉、

元和六年庚申二月 日

日本國 臣大炊助藤原利勝謹呈
安南國大都統 麾下、

獻短札矢愚慮、吾

大樹源君之慈意、以連署達之、可知々々、抑
至微臣亦 密絹十卷鐵炮一挺 賜之、遠

邦之珍種、原意難報、不違先約、商船來者往
者、海上無恙著岸、兩國士民之寬幸也、彌止

非義非法、專至正直者、自國

他邦之仁政也 馬具 鞍轡等一縮 贈進之、聊表微志

矣、餘事期望來信、不具、

元和六年庚申二月 日

日本國 臣上野介藤原正純 呈上

安南國大都統 麾下、

連署之外別裁愚書、述私意、

貴邦之異產 伽羅一枚密絹五卷 芳惠感佩々々、如先

約商船往來、自

他之大幸也、遙雖隔渤海、其志相通、則情義

不異並隣者乎、於吾

押金屏風一奴

邦聊不可有疎濶矣 贈進之、以表微

志、餘蘊期他日、不備、

元和六年庚申二月 日

右三通共ニ引合ニ書テ、上野殿大炊殿ヘ掛御目候、

文言一段と可然由也、連署ノ一通ヲハ上様ヘ御次而

ヲ以、可掛御目由候て、大炊殿懷中ヘ御入候、殘二

通ハ則清書ヲ頼入由候間、傳取テ歸院ス、兩人ヘノ

音物又兩人ヨリノ返ニテ音物ハ書付テ可給由也、

同廿一日之極晚ニ、大炊殿之内荒木虎之助使ニ來ル

連署ノ下書掛御目候、御意ニ入候間清書可仕由也、

交趾ヨリ大炊殿ヘノ信物ハ北絹十卷、鐵炮一挺來候

由也、大炊殿より交趾ヘノ返禮ハ馬具鞍轡等一縮

ト也、廿二日ニ清書スル也、日付ヲハ二月ノ吉日ヲ

見候て書候ヘトノ事ニ候、十一日ト書也、連書ハ右

ノ下書ノ如ク、但間合鳥子ヲ口五六寸明テ書之、年

號迄十三行、一行ニ十六字、年號ハ四行ノケテ書之

兩人ノ連判ノ朱印ヲ、年號ノ行ヲハサミテ兩方ニ押
候様ニ認之、ヲクニ來紙アリ、ヲクヨリヒタト
卷テ、架籠ニ入、架籠モ同シ鳥子キリテ如常認之、
架籠上ノ書付

日本國臣上野介藤原正純
大炊助藤原利勝相共呈于書
謹封
安南國大都統 麾下

右大炊殿ノ書モ、如右清書スル、間合鳥子十一行ニ
十六字、架籠モ同前也、大炊助 一人ノ

名也、書ノ年號二行ノケテ書之、朱印年號ノ行ノ下
ニ押様ニ認也、

十三日早朝ニ右ノ書ヲ大炊殿ヘ持參、則御對面、朱
印ノ押所以下具ニ申渡ス、連署朱印奥口ノ賞翫御尋
候間、口ヲ上リニ御押候へと申渡ス、年號ノ行ヲ兩印
ノ真中ニト申渡ノ歸ル也、廿六日本上野殿より使ニ
高木藏人來ル、交趾ヘノ書清書、頼由也、交趾ヨリ音
信ハ北絹五卷伽羅一木ト也、又交趾ヘノ返禮ハ金屏
一双ト也、則右之下書ノ如ク、音信物ヲ書、清書ス
ル、間ニ合鳥架籠以下大炊ノ書ト同前也、廿七日上

野殿へ持参スル、則御對面也、眼病ニテ奥ノ間ニ御座候、書之様子具ニ直ニ申渡ス、印押スヲモ藏人ニ印ヲ持セ可被越候間、印肉ニ而押候様ニと也、數刻對談了而歸院、則高木藏人印ヲ被持下候間、對面ノ印肉取出し、印ヲ押ノ、架籠へ入、ノリ付ニ渡之、印肉ノ合様ヲモ教ル也

一慶長十七壬子歲六月廿日、駿府 御城へ出仕申、但傳也於上方所勞本復、十九日ニ下府、則翌日出仕申候、大御所様御機嫌能御對面、則濃毘數般へ御書を可被遣候、佛法ヲ日本ニ弘候事無用、只商賈斗ニ船往來可有之由、御書可相認旨被仰出候也、白井兵庫當院へ被來、對面、兵庫被申候ハ、此御書ハ御返書也、去々年濃毘數般ノ船損、日本ニ來ル時、上様ハ御船被仰付歸國、其御禮ニ船ヲ渡て御音信物ヲ上、書ヲ捧候也。具ニ被語候也、本多上野殿添狀アリ。

覺

一のひすはんやへ 御朱印一通
一ろすんへ 御朱印一通

此二通ニ、御朱印者年々異國へ渡海之時御朱印被下候大形、其文言ニあそはされ候へく候。

已上

一のすはんや之國王、いざろいへ御返事あそはされ候へく候、いそろい之御音物之注文、上野所ニ御座候間、明日可進候、又大御所様ハのひすはんや國王いそろいへも御音信之物可有之候間、其御心得有へく候、委細ハ向井兵庫殿可被仰候、御相談尤候、以上

六月廿日

本上野判

金地院

私ノ覺ニのひすはんやろそんへの日本船渡ル、右之二通ノ御朱印ハ不被遣間不書也

日本國 源家康 復章 一行

濃毘數般國主 麾下

來翰薰閱、再三罔措、況又方物如目錄領之、惠